

平成二十一年一月一日発行 第十九巻第一号 通巻第二二二号 (毎月一回一日発行)
平成三年九月十八日第二種郵便物認可

槐

かい

平成21年1月号

岡井省二創刊



淑
氣

高橋将夫

元朝や丑年ゆつくり動きだす
高きから低きへ移る初明り
千年の杉の靈氣と淑氣かな
衣の雲かかり初日は月のごと

初戎笹に星影ついてきし
護摩の火に去来するもの去年今年
達磨市どれも未来を見てゐる目
嫁が君隠れ上手に聞き上手
韋駄天の足元にくる初雀
羽子板は羽根の行方を知らぬなり
王道と覇道交はる冬野かな

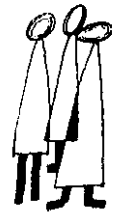
槐安集

水野恒彦

夕花野抜けきし人語低きかな
曼珠沙華消えたるあとの虚空かな
夜の記憶のみの旅寝の露の音
魂^{ソウル}抜けの音して一葉落ちにけり
鯛の鯛ゆつくりさががす秋の暮

延広禎一

引き潮の波こそよけれ南洲忌
飴細工の指先眩し鶴来る
里山に風出でにけり秋燕
人拂ひするやつまべに弾けたる
口締めてしやんとしなはれ泡立草



加藤みき

正月やくさぐさあれど米の飯
もみづるや崖に遣りし魚の顔
すみ^{ルイサタの会}ずみに響むピアニシモ秋の昼
紅葉山に囲まれ青き畑ひとつ
枯蓬高きかをりを放ちけり

石脇みはる

椎の実を噛む移り気な漢かな
飛びたちし枯蟻螂の目指すもの
秋の日イ受けてゐたりし瑪瑙かな
聖護院蕪の生をかじりけり
芋水車 回る 熊川宿の 昼

中島陽華

尊^{そん}馬^ば油^ゆ塗る手足あり秋の月
傷口の繻帯取れり水の鴛鴦
宙返り半纏木の黄葉して
海坂をはるかにしたり雁渡
血の色や白玉楼に汲む新酒

竹内悦子

露の日の露に触れたるあぎとかな
拭いてゐる畳六枚黍あらし
六角堂めぐる枯葉の唄と舞
はすの実の飛びつくしたる蓮の骨
この坂の十一月の曼陀羅華

栗栖恵通子

上向きの蛇口ありけり秋の虹
九代目の押隈にじむ秋暑かな
○ ビルと△塔と鯛雲
秋うらら膝に鞆を置いてゐる
横向きに鎌かかりをる月夜かな

大島翠木

思ひとは金木屋の丸さかな
渡り廊下を横切つてゆく後の月
十三夜黒外郎の齒形かな
宝物殿南瓜の種を縁に干し
月の水際に柿渋の溜まりつつ

雨村敏子

枯れ切つてをらぬ蠟螂の眼かな
産土へ赤き帯曳く曼珠沙華
山の音聴いてをりけり雁渡し
星の夜の霜月蝶と差し向ひ
種の浜に潮さして来し後の月

小形さとる

花芒すなはち翁嫗かな
梅町をいざよふ月を想ひをり
ほろ酔や栗名月に金の縁へ
山住の貌こそよけれ今年藁
曼珠沙華聲に憶えのありにけり

本多俊子

この星の水はうるはし寒露かな
襖入る太平洋の白波に
穴惑赤黄青を身にまとひ
露寒の活断層を男来る
遊星にざくろの割れる音すなり

久津見風牛

貨車に月積みてホームに止まりたる
竹伐りの翁に嫗のメールあり
せかせかと秋陽すぎゆく音のして
冬服に化けし女のめくら縞
暗がりの楯火に母のうづくまる

近藤 きくえ

弘法の風につつまれ桐は実に
白萩のこぼるるままにかくれんぼ
先客は龍田姫なり抹茶の香
遠き日に想ひ馳せをり星月夜
桐一葉かわきし風のいづこより

近藤 喜子

桃のなか母の言葉のぎつしりと
命がけの色となりたる秋の鮎
もみづるや水の快樂の満面に
秋の聲ひと雨ごとに深まり来
体内の水の波立つ稲光

谷村 幸子

色変へぬ気比の松原風通る
秋麗の水豊かなる鶺鴒の瀬かな
色の浜や翁の句碑に萩の風
木犀の薫たのしみ床みがく
鶏頭に礼をいいつつ種をとる



槐市集

十川たかし

林間に魁夷の白馬秋深む
何ごとの起りて鶉の高音かな
地に生えるものみな愛しや秋の暮
笹鳴の止みたる藪に雨の音
秋雨の運動場を横切りぬ

醍醐季世女

菩提寺の千年の松萩の風
命日の水琴窟やお茶の花
惜し気なく手折りてくれし秋海棠
横丁の軒下に咲く藤袴
ひと握りむかご貫ひて零余子飯

竹中一花

山栗のはぢけし夜明け水の音
陰明師秋の鶉の瀬の渦濁る
さはやかや磨く塗箸海の色
秋潮は茜に満ちし色の浜
冬を呼ぶ風の生まれし鞍馬かな

谷岡尚美

中世の街の晚鐘秋行けり
二フランに買ふ無花果と一会かな
般若寺の楼門の空烏瓜
菊香る暗峠越ゆるなり
姿見に映つてゐたり金木犀



槐集

高橋将夫選

大花野空の吐息の白い雲
枚方 中野 京子

飛ぶ穂絮なんの扉が開かるる
天高くのぼりし魂の笑顔かな
木犀やあの山この川遠くなる
大空やぬすつと萩の種まみれ

岡崎 岩月優美子

青蜜柑未知の世界へ投げてみる
毬栗のすくと懺悔急かさるる
焼かれても貴公子の貌秋の鮎
夕暮れの秋野にトランペットの音
晩秋や虚構に遊ぶペンの先
大雨の置きて行きしは秋の虹
爽やかに太古の星の登りゆく
花野にて笑ひ声して父の肩
谷ふかく紅の火種の思草
草々の深閑として帰燕かな

松原 仲子

ほほづきの赤は母なり波寄する
安城 近藤 公子

降り立てば足裏にやさし枯野かな
肝つ玉据つてをりし海鼠かな
その赤にゆきあひにけり烏瓜
もののふのわらひごえかも落葉かな

鯨一列頭かしらを上げて焼かれけり
守口 柳川 晋

鬼の子の空気を読んでをりしかな
秋分の井戸に昼間の星ありき
蟠わだかまるところもありて水澄めり
竜淵に潜み電波の届かざる
霧動き山々の羽化はじまれり
産小屋に原初のかゝる雁渡し
ずんずんと星に近づくとオクラかな
秋興や夜は蘭亭の叙を写す
おほかたはよき道なりし零余子飯

枚方 富松 寛子

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

大花野 空の吐息の白い雲 中野 京子

花野の空に浮かぶ雲がまるで吐息のように見えたという。花野は華やかそうだが、秋草に一抹の寂しさも感じる。この吐息にはそんなかそけさが漂うようだ。

青蜜柑未知の世界へ投げてみる 岩月優美子

投げられた蜜柑が落ちたところはたしかに蜜柑にとつて未知の世界。投げたのは未だ青い蜜柑に未知の世界を見せてやろうという親心なのだろう。

谷ふかく紅の火種の思草 松原 伸子

思草は薄などの根に寄生するハマウツボ科の草。先端に淡い紫色の大型の花を咲かせる。谷の奥深くで見た思草は紅の火種のようにだったという。思草は又の名を南蛮煙管とも言う。やはり火種だ。

ほほづきの赤は母なり波寄する 近藤 公子

作者は鬼灯の素朴な赤に母の愛を感じ取る。母の愛は海より深いという。「波寄する」の措辞はそんな深い母の愛を想起させる。

鯨一列頭を上げて焼かれけり 柳川 晋

主観の強い前掲四句に対し、実に即物的な一句。客観写生のようだが、単なる写生ではない。どれもみな頭を上げている心意に共感する。

霧動き山々の羽化はじまれり 富松 寛子

山々にかかった霧が動く景を見て羽化が始まったようだといふ。なるほど、動く霧の中からもぞもぞと山が生まれてきそう。

神主が先づどぶろくを祓ひけり 十川たかし

思わず口元がほころぶ一句。御払いの対象がどぶろくだからといって特段驚かないが、それでいて何故かくすぐられる。俳諧。

鬼ふすべつまみごろなる若さかな 大山 里

鬼ふすべは、若いときは固い灰白色で、しだいに表皮が不規則に破れて黄褐色のスポンジ状となり、さわると胞子が煙のように出る。つまみごろの若さは憧憬。

照らし合ふ非在の鏡に菊人形 西村 純太

対の鏡に菊人形が映っている。その鏡が非在の鏡だということから、なんとも怪しいげな世界に誘われる。

風のほか鳩おびやかす何もなし 久保東海司

眼前に鳩の浮ぶ水面の景が広がる。視界を妨げるものは何もなく、ただ冷たい風が吹きすぎてゆくばかり。

盧舍那仏の大和におはす神無月 中田 禎子

神々は出雲に出払っても、大和には盧舍那仏がいて、ならん常と変わるところはない。あたりまえの不思議。

(以下略)